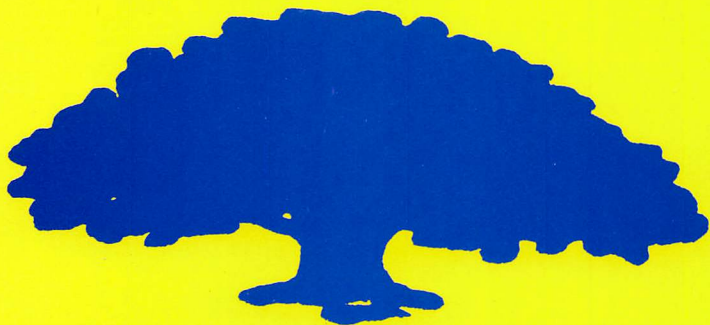


今なぜ正法か

宗教改革の書



高橋信次師の教えを
継承し、
ともに真理を学ぶ

国際正法協会編

この冊子は、次の二通りの目的を持ってつくった。

一、今まで無信仰であつて、これから信仰しようという人への宗教選択の基準として。

二、すでに信仰しているが、その信仰に疑問を持っている人への救いの道しるべとして。

正しい信仰をすれば疑問は起こらない。信仰をしていて疑問が起こるのは、その宗教が間違っているからである。

私達は、日本人の信仰を正しいものになしようと思つて運動している。

今なぜ正法か

宗教改革の書

国際正法協会編

現在ほどいろいろな宗教が氾濫している時代はない。それにオカルトブーム、心靈ブーム、あるいは、星座占い、気学、人相、手相、家相など、運命学花盛りで、人々は幸福を求めてそれらの間を右往左往している。

このように「なにが正しいか」、「どのような宗教が正しいか」、その判断の基準が全くわからなくなってきた時代を「末法」という。

末法になると、必ず「なにが正しいか」を示す人類の救世主が現れて「正法」を説かれることになっている。それが高橋信次先生であった。国際正法協会はその高橋信次先生の教えを正しく継承してゆくために創設された。

大川隆法なる人物が現れて、「幸福の科学」をつくり、高橋信次先生の説を盗用して

たくさんの人を迷わせた。その「幸福の科学」をやめて国際正法協会の会員になった人達から、「今なぜ正法か」を新たにづくってほしい、自分が勧めて「幸福の科学」に入会させた人達に配りたい、と要望があった。「今なぜ正法か」は前にパンフレットにしたことがあったが、今回それを小冊子にした。

「正しい信仰を阻害するヌミノーゼ心理とエゴイズム」の章を読まれると、「幸福の科学」の会員は全部「ヌミノーゼ心理」の患者であることがわかるであろう。大川隆法氏は高橋信次先生の名や、日本人が知っている有名な人々の名を盗用して、霊能者を装っている稀代の宗教的な詐欺師なのである。大川隆法氏の仮面を剥ぐ本を私は四冊出版した。

『大川隆法』はこう読め——正法からみた「幸福の科学」

続『大川隆法』はこう読め——正法からみた「太陽の法」

『大川隆法は仏陀ではない——幸福瞑想への警告』

『高橋信次師こそは真の仏陀であった』

「GLA」も仮面を被った団体で、GLAの会員も全員がヌミノーゼ心理の患者であ

る。「正しい信仰を阻害するヌミノーゼ心理とエゴイズム」は、私が『正法と現代宗教』の中に書いたものであるが、これは当初、GLAの会員を覚醒させることを目的として書いたのであった。

GLAの主宰高橋佳子氏は「私は人類の救世主ミカエルである。釈迦もキリストも高橋信次も、人類が救われる道を説かなかった。昭和五十七年までには、世界の全人類は私の前に跪くであろう」と、昭和五十二年三月五日に「ミカエル宣言」なるものをした。

世界の宗教史上、釈迦、キリストをこれほどまでにくさした人間はほかにはいない。それでもGLAの会員になっている人がいるのは、高橋佳子氏を霊能者だと信じている若い人たちが多いからである。

高橋佳子氏にはなんの霊能もない。その高橋佳子氏を霊能者に仕立て上げたのは、SF作家の平井和正氏である。平井氏は高橋佳子氏を霊能者に仕立て上げるために『真創生記』を書いて、それを高橋佳子著として祥伝社から出版した。本は独り歩きするから、実体ではない嘘が書いてあっても、書店で『真創生記』を買って読んだ人はみな、高橋佳子氏を霊能者と思ってGLAに入会するのである。全く愚かな人達である。

創価学会の池田大作氏を信じている人達もまた、ヌミノーゼ心理患者である。池田大作氏は権力欲、名誉欲、金銭欲の人一倍強い俗人で、宗教家の資格はない。

そのほか、天理教、生長の家、立正佼正会、阿含宗など、およそ信仰をしている日本人が共通的に持っているヌミノーゼ心理、このヌミノーゼ心理を除かないと、正しい宗教であるかどうか、正しい宗教の指導者であるかどうかは見えてこない。教祖を神格化するのが「ヌミノーゼ心理」である。

その点でこの小冊子は、日本の宗教を正しくする重大な内容を持っているのであるから、どんな信仰をしている人々も読まなければならない、そして家庭に必ず一冊は置かれなければならないものである。

平成五年一月

紫水園にて 園頭広周

目次

はしがき 1

正法とは、国際正法協会とは 11

正法とは 13

国際正法協会とは 15

正しい宗教を求めの人へ 17

信仰に疑問を持つ人へ 19

ふしぎな日本人／なぜ、信仰に疑問が起こるのか／悩みが起

こゝるのは、本山や本部が悪いのか、信者が悪いのか

宗教の分類

啓示宗教／知的宗教／民族宗教／土着民俗宗教／憑依宗教
(別名、霊能宗教)／新興宗教はなぜやめる人が多いのか／宗
教産業となった新興宗教／なぜ正法会(現在、国際正法協会
と改称)をつくったか／疑問や矛盾が起こるのは、その宗教
が間違っているからである

22

正しい信仰を阻害するヌミノーゼ心理とエゴイズム

29

ヌミノーゼ心理とはなにか

31

なにが問題なのか／正しい信仰のための心理／ヌミノーゼ心
理はなぜ起こるか／ヌミノーゼ心理は偏向・倒錯心理であ
る／ヌミノーゼ心理の解決法

エゴイズムとは／集団エゴイズム・精神公害・宗教我／正法
こそヌミノーゼ心理とエゴイズム克服の道／病氣治しと宗教

正しい宗教とはなにか 67

宗教の正しさを判断する三十条の基準

- 1 永遠不変、一貫性があるか／2 普遍妥当性があるか／3
- 正しい宗教の三つの条件／4 神と人間との間に仲介者はいらない／5 宗教と科学は一致する／6 神に神殿はいらない／7 偶像崇拜をしない／8 神を祭る儀式祭典をしない／9 「罰が当たる」と恐怖心を与えない／10 正しい宗教は世襲化しない／11 教祖を神格化しない／12 正しい宗教は自力を説く。他力では救われない／13 霊能力中心の説き方をしない／14 いうこととやることが一致しない宗教は正しくない

い／15 念仏、題目だけでは救われない／16 祈禱、護摩供養では救われない／17 禪定瞑想を教えない宗教は正しくない／18 現世利益だけを説く宗教は正しくない／19 正しい宗教は最初に「疑問を持つ」と説く。最初から「すなおに信ぜよ」とはいわない／20 正しい宗教は金で救われることを説かない。布施を強制しない／21 正しい宗教は運命学をいわない／22 正しい宗教は「霊肉一体」、「色心不二」、「心身一如」を正しく説く／23 「肉体なし」、「物質なし」と説く宗教は正しくない／24 正しい宗教は「水子が崇る」といわない／25 正しい宗教は、先祖供養をしたら守護霊が憑くといわない／26 正しい宗教は、輪廻転生を説く／27 「あなたの因縁、業は、私が引き受けました」とか、「因縁を切ってあげます」といって金を取る宗教家を信用してはならない／28 正しい宗教は「自分を大事にせよ」と説く。「まず人を救いなさい」とはいわない／29 正しい宗教は「本を売れ、会員をふやせ」と強制しない／30 正しい宗教は「悟り」を説く。

宗教を逃避の場所にしてはならない

自由人になる道、解脱とは

92

宗教と道德の違い

94

「終末正統性」を持つ、神に許され、選ばれた正しい宗教

96

正しい宗教かどうかを判断する基礎知識

100

1 現界のほかに霊界がある／2 神の世界のほかに悪魔の世
界がある／3 あの世にあるものがこの世にある／4 現界と
霊界は連続している／5 部分神理では救われない、全体神
理でなければ救われない

全体神理を説いているのは「正法」だけである

104

参考文献

107

入会案内

108

正法とは、国際正法協会とは

正法とは

「正法」とは、神がつくられた大宇宙大自然の神理であり、宗教はその神理を説き、その神理に発した道徳を教え、正しい秩序ある社会をつくり、人間が幸せになる道を教えるものである。

神は生命を創造し、物質を創造し、生命は生命の法則をもって、物質は物質の法則により、それぞれ循環と因縁、因果の法則によって存在せしめられることとなったのである。それゆえに、生命の法則を説く宗教と、物質の法則を説く科学とは表裏一体となり、切り離すことはできないものとして存在しているのである。これを物心一如、色心不二、心身一如ともいう。

これまで宗教と科学とが相反するかのように説いてきたのは、宗教家が真の神理を知

らず、科学者もまた無知であったからである。

宗教と科学とが一体であることを知ることによって、初めて真の人間性が開発され、大宇宙大神霊、即ち神と調和され、人々の心は安らぎ、地球上に極楽浄土が完成されるのである。

極大の大宇宙世界から、極微の原子世界に至るまで、一貫した法則によって支配され、その中に人は心を持って存在している。心とは意識であり、魂であり、霊である。

仏法によって生命の不変を説かれた釈迦も、大生命大自然の神理を説かれたキリストも、大自然の神理に到達された偉大なる先覚者であったのである。

大宇宙は神によってつくられた。大宇宙体は神の意識の表現である。この、神の意識を「大宇宙大神霊」という。「大宇宙大神霊」は智慧と慈悲とを持つ一大生命エネルギーの根源であり、万生万物を存在せしめ、かつ生かしているのである。

正法とは、神がつくられた永遠不変にして普遍的な道である。

国際正法協会とは

国際正法協会の創設者は、釈迦の生まれ変わりであった高橋信次先生であるといつてよい。

過去、現在、未来の三世を見通す力を持たれた高橋信次先生は、釈迦とキリストの教えの原点を説き、二千五百年から二千年の間に歪められた教えを修正して、この世を去られた。

大宇宙大神霊、即ち神の心を完全に知り、神と一体となって神の神理を説く権能を持たれた方を、仏教では仏陀、または如来といい、キリスト教ではメシアという。であるがゆえに、釈迦以前にも正法を説かれた如来、仏陀があり、キリスト以前にも正法を説かれたメシアがあったのである。

天地創造以来、神は、人間の住むこの地球を極楽浄土のユートピアにせんがために、必要に応じて如来、即ちメシアをつかわして、正法を説かしめられた。

現在の世界の人類が歴史上もっとも近く知っているのが、仏法を説かれた釈迦であり、キリスト教を説かれたキリストである。今は仏教とキリスト教とは全く違った宗教のようになつてしまっているが、実際は一つの教えなのであり、釈迦が説かれた神理も、キリストが説かれた神理も一つなのである。

この、釈迦が説かれた神理も、キリストが説かれた神理も、本来、神がつくられた一つの神理、即ち正法であつたということを世界の人類が知るまでは、この世界は極楽浄土、即ち平和にはならないであらう。

国際正法協会は、この、神がつくられ、近くにおいては、釈迦、キリストが、そして高橋信次先生が説き示された正法を、全世界に伝える使命をもつてつくられたのである。

世界を平和にするには、一人ひとりが正法を知る以外にはない。真の世界平和を念願し、かつ真の人生の幸福を望まれる方は、国際正法協会会員となつて正法を学ばれよ。正法を学ぶ人のところには、神の光が点せられて、神の守りが与えられるであらう。

正しい宗教を求め人へ

信仰に疑問を持つ人へ

ふしぎな日本人

現在、日本には約十八万五千の宗教法人があり、毎年二百ずつふえている。

宗教がこんなにたくさんあっていいのであろうか。日本人くらい、宗教について曖昧な民族はない。たいていの家には神棚があって、仏壇があって、子どもが生まれるとお宮参りをして、死ねばお寺で葬式をして、クリスマスだというとクリスマスケーキを買ってきて、病気だ不幸だというところかの新興宗教に入って、さらによく当たるといふ霊能者がいるとそこで拝んでもらう。

西洋の学者が「日本人はわからない」という原因の第一は、このような信仰に対する曖昧さである。

なぜ、信仰に疑問が起こるのか

「あなたは今、幸せですか」、「幸せになりたいと思いませんか」

どこの宗教団体でも信者を勧誘する時にいっている言葉である。

人間はみな幸せになりたいと思っているから、その呼びかけは決して間違いではない。だが、信者になった人がみな幸せになるかという点、そうではない。幸せになったという人もいれば、いっこうに幸せにならないという人もいる。また、最初は幸せになったという人でも、しばらくするうちに解決できない問題が起こってきて、教えられた通りにやってもうまくゆかないということが起こってくる。

そのうえに、寄付をしろ、信者をふやせ、本を売れ、集会に出てこいなど、いろいろな枠をはめられ、そのために苦勞して、「こんなことなら信仰しない方がよっぽどましだった」という悩みを持っていない人は一人もいないといっている。

悩みが起こるのは、本山や本部が悪いのか、信者が悪いのか

信者が悩みを持つと、「信心（信仰）が足りないからだ」と、どこの宗教団体でもい

う。本当にそうなのだろうか。本山や本部の方が間違っているということはないの
うか。信者だけが間違っているのでしょうか。

「一 所懸命にやれば疑問はなくなる」というが、本当にそうなのだろうか。

宗教の分類

なぜ十八万五千もの宗教法人ができたのであろうか。これからまだどれくらいふえるかわからない。宗教とは、神仏を祭り、信ずることだ、と普通考えられているが、十八万五千も神仏があり、また、これからも本尊として祭る神仏がまだふえていくということになるが、そんなにたくさん神仏があるのであろうか。

日本の宗教を大きく分けると五つに分類できる。

- 1 啓示宗教
- 2 知的宗教
- 3 民族宗教
- 4 土着民俗宗教

5 憑依宗教

以下、それぞれを説明する。

啓示宗教

真実の神、仏の啓示によってはじめられた宗教。たとえば、釈迦、キリストが神仏の啓示を受けて説かれたそのままの宗教である。啓示宗教には一貫性があり、神さまや仏さまのいわれることが途中でくるくる変わることはない。くるくる変わるのには正しい神仏の教えではない証拠である。

知的宗教

代表的な知的宗教といえば、「生長の家」である。教祖の頭脳で知的につくり上げられた宗教であるから、教義が途中でくるくる変わっている。

釈迦、キリストの教えも、最初は正しかったのであるが、後世になると、説く人の知によって歪められて、説くことが変わって現在に至っている。

桐山靖雄氏の「阿含宗」も、桐山氏の頭で考えてつくられた宗教だから、説くことがくるくる変わってきているのである。

民族宗教

その民族特有の宗教。たとえば神道がそうである。神道は日本民族特有のもので、ほかの民族は信じない。ほかの民族にはほかの民族特有の宗教がある。

土着民俗宗教

その地方だけの特有の信仰がある。痔の神さま、はしかの神さま、縁結びの神さま、安産の神さまなど、実にいろいろの神さまがある。神体も、石であったり、木であったり、日本人はなんでも神さまにして拝む悪い癖がある。別府の地獄湯では温泉でワニを飼っていて、そのワニは三メートルくらいあるが、昼寝しているワニの背中にお賽銭がいっぱいのおつている。大阪の阪神地下街の人工の川（トレビの川）にもお賽銭が投げ入れてある。

土着信仰は、日本人のこうした、なんでも拜むという心が生み出したもので、こんなものは、本当の宗教とはいえない。

憑依宗教（別名、霊能宗教）

日本の霊能者の大半は、動物霊や地獄霊に憑依されているのである。動物霊や地獄霊が、観世音菩薩とか不動明王だとか名乗って出てきている。動物霊や地獄霊でも病氣治しくらいは簡単にやるが、病氣を治すからといって、それだけで信じてはならない。

その教祖が動物霊や地獄霊に憑依されているかどうかを簡単に見分ける方法は次の通りである。

- 1 金銭に汚くなる。
- 2 傲慢になる。人を寄せつけない。
- 3 いうことがくるくる変わる。
- 4 いうこととやることが一致しない。
- 5 いうことを聞かない者には「罰が当たる」といって脅迫する。

6 必ず女性問題を起こす。性的欲望が強くなる。

7 肌の色が健康色でない。

8 服装が派手になる。常人と違った特別の服装をする。

このような教祖のいうことは信じてはならない。

新興宗教はなぜやめる人が多いのか

立正佼正会、創価学会、生長の家、PL、霊友会、天理教、金光教、メシア教、世界真光文明協会、白光真宏会など、いろいろな宗教団体があるが、今はどこの宗教団体でも、入会する人よりも脱会する人が多いのが現状である。

なぜやめるのか、というと、一所懸命にやってみても疑問がなくならないからである。熱心にやればやるほど苦しくなる。それに、今の新興宗教の信仰には金がかかる。信仰するのにそんなに金が必要なのであるか。「貧乏人は信仰できない」、「金持ちでなければ信仰できない」というのが新興宗教をやめた人の口ぐせである。

宗教産業となった新興宗教

日本で一番最初に「宗教産業」という言葉を使ったのは私（園頭）である。

私は以前、ある大きな新興宗教の中央部にいた。だから多くの新興宗教の内部事情にもくわしい。新興宗教団体は実に巧妙に名目をつけて信者から金を取っている。毎月の会費、奉納金、毎月の先祖供養、春と秋の彼岸の先祖供養、元日と大晦日の特別祈願、毎月の講演会費、毎月の新聞代、本代など、そのほか、特別の行事があるとそのつど寄付をさせている。

たくさん寄付するほど功德がある、というから競争的に寄付をする。果たしてたくさん寄付する人ほど功德があるのだろうか。

やめた人達が一樣にいうのは、「こんなに金がかかっては信仰もできない」ということである。これでよいのだろうか。

なぜ正法会（現在、国際正法協会と改称）をつくったか

私が正法会をつくったのは、ほかでもなく、「信仰してこんなに苦しむのであったら、

むしろ信仰しない方がよかった」といって、信仰したが故に苦しんでいる人を救うためである。それともう一つは、信仰はしたいが、どんな信仰をすればよいのかわからない、と思っている人々に、正しい信仰の道を教えるためである。勿論、病氣や不幸で悩んでいる人々も救わなければならない。

現在、国際正法協会では、どこの宗教団体でも救われなかった人達が、たくさん救われている（正法会としてスタートしたが、ハワイ、ロサンゼルス、ニューヨーク、シンガポール、韓国などと活動が広がってゆくうちに、国際的にも通用する名称に変えた方がよいということになって、「国際正法協会」と改称した）。

疑問や矛盾が起こるのは、その宗教が間違っているからである

信者が疑問を持つと「信心が足りない」と指導者はいう。私は、新興宗教団体における経験から、信者が疑問を持つ原因は、みなその宗教団体の教義、あるいは指導方針の間違にあることがわかってきた。

正しい信仰を阻害するヌミノーゼ心理とエゴイズム

ヌミノーゼ心理とはなにか

なにが問題なのか

熱心に信仰していると思っっているのに、どうして次々と疑問が起こり、心が苦しくなってくるのであろうか、信仰してこんなに苦しむくらいなら、むしろ信仰しない方がましだった、という悩みを持たない人はおそらく一人もないであろう。信者がそういう悩みを持ったからといって、その悩みを解決してくれる宗教団体はない。

このような悩みが起こってくるのは、その宗教団体の教義が間違っているのか、それともその人の信仰態度が間違っているのか。教義が正しくても、自分の信仰態度が間違っていれば悩みが起こるし、自分の信仰態度は正しくても、教義が間違っていれば当然悩みが起こってくる。本当はどちらなのであろうか。

どちらに間違いがあるのかをはっきりと知るために処理しておかなければならないのが、「ヌミノローゼ心理」と「エゴイズム」である。

一般社会の団体よりも、宗教団体の内部の方が一層醜いというのも、ヌミノローゼ心理とエゴイズムに原因がある。

また、道徳を宗教だと思っているのが、日本の宗教界である。

指導者の側も、道徳的な話をして、それで宗教の指導をしていると思っているし、信者の側も、道徳的な話を聞かされて、宗教の話聞いたと思っている。どこの宗教団体でも道徳の話をしているために、結局、どこの宗教団体でも同じようなものだ、と知っている人が案外多い。

宗教と道徳は違うのである。その違いをはっきりしないと、正しい信仰をすることはできない。

さらに問題なのは、現世利益を求めるのが宗教だと思っていることである。信仰を勧められると、まず最初に「おかげがあるか、ないか」という。現世利益を中心とするために、うまく金儲けできた人は信仰ができていい、どんなにまじめで人柄がよく

ても、うまく金儲けできない人は、信仰ができていないのだ、という見方をする。たくさん寄付した人をりっぱな信仰をしているといい、寄付する金を持たない人は信仰の足りない人だという。信仰も金次第である。金がないと信仰もできないといわれるようになったのは、宗教が現世利益を目的としているからである。

病気が治る。それは奇蹟でもなんでもない。それが奇蹟と見えるのは、精神身体医学、精神科学の法則を知らないからである。心で病気が治るといふ原理法則がわかれば、宗教団体に奇蹟を求める必要はない。どのようにして、心の持ち方を変えるかを学べばよい。

病気が治り、金持ちになってみたって、人間には必ず死が訪れる。死ぬ時はなにも持ってゆけない。

宗教とはなんなのか、信仰とはなんなのか、正しい信仰をするためには最低これだけのことは知っておいてもらいたい、ということをこれから明らかにしてゆきたい。

この本に書いてあることをよく理解してくだされば、日本の新興宗教の実体が、あなたの目にはっきりと見えてきて、あなたにはおのずから正しい宗教を選ぶ力ができてく

るはずである。

正しい信仰のための心理

教祖を神格化している宗教は邪教である。教祖は神でなくて人間である。神理を正しく知っている教祖は、周囲が自分を神格化しようとする、それを許さないののである。周囲が神格化することを許し、自分が神さまになっていい気にいる教祖は、神理がわかっていないのである。教祖を神格化し、盲信し狂信して、正しい知性と批判精神を失わしめるのが、ヌミノーゼ心理である。だから、ヌミノーゼ心理を克服しないと、正しい信仰はできない。

かつてヨーロッパで、神の名によるきわめて残酷な宗教戦争が行われた。また、日本の新興宗教の信者で、これが信仰をしている人達のやることであろうかと思われるような、非常識きわまりない、非人情、非人間的な折伏や、ほかの宗教の信者との争いなどが行われたのも、ヌミノーゼ心理を持っていることが原因である（以下、八木誠一著『キリスト教は信じうるか』を参考に解説する）。

ヌミノーゼ心理はなぜ起こるか

人間は、なにか神秘的なものに憧れ、できればそういう力を自分も持ちたいと思うものである。そういう心は、自分を自分で信ずることができない——自立性のない——心の弱い人に多い。劣等感、罪悪感、無力感、無能力感などを持っている人に多い。

また反面、無力感、無能力感、劣等感などの反動、裏返しとして、神秘的な力を身につけて、その力を人に誇示し、あるいは利用して権力を持ちたいと思っている、極端に自己顕示欲の強い者ほど、ヌミノーゼ心理に陥りやすい。

だから、ヌミノーゼ心理に陥る者は、いわば一種の精神異常者であって、健全な心の持ち主ではないのである。

このようなヌミノーゼ心理に陥った精神異常者を、日本の宗教団体は、信仰が純粹であるといっているのである。正しい批判精神をなくして、盲目的に狂信させる宗教は邪教であり、正しい批判精神をなくして盲信させ、狂信させるのがヌミノーゼ心理である。ヌミノーゼ心理に陥った者の集団では、神秘力を身につけて自己顕示したいと思っている権力志向型の者が、神秘力に憧れていて、無力感、無能力感を脱しきれず、力強く

自分を指導してくれる者が現れることを待っている気の弱い者を、思いのままに支配するという現象が起こってくる。

即ち、強力に教祖を神格化し、教祖の力を背景にして自分の権力欲、支配欲を満足させようと思っている者が、しきりに教祖の機嫌をとって、そうでない者、そこまでできない者達を支配してゆくという支配体制が、組織の中に現れてくるのである。そうして、本当は教祖自身の間違いであっても、信者達からは、「教祖がそんなことをいわれるはずがない。側近が悪いのである」という形の批判が出てくるようになるのである。

ヌミノーゼ心理は、つぎのようなものに心をひきつけられる心理状態から、その人の心の際に起こってくるのである。

深い崇高なもの。尊厳で偉大なもの。人に祝福を与え、それを犯す者には罰が当たると考えられているもの。人を畏怖戦慄させるもの。なぜかわからないがぞっとするようなもの。うす気味の悪いもの。人を恐れさせ遠ざけながら、なんらかの点でひきつけるもの。ありふれていないもの。見なれていないもの。日常のレベルを超えたもの。

このような力を持っている者があると、その人物にあやかりたいと思い、また、その

人物を異常に神秘化し、神格化し、絶対化して、その人物と自分とを一体として見ようとする自己同一化が起こる。それがヌミノーゼ心理である。

ヌミノーゼ心理が起こると、各人はそれぞれに、教祖が本来はそのような力を持っていないのにもかかわらず、こういう力を持っていられるはずだと勝手に想像し、その想像を現実のものと錯覚し、その錯覚から起こる、教祖が異常神秘力を持っているものとの想像は、ますますふくれあがり、そのため、盲信、狂信がさらに昂進する。そしてその人物を神聖視し、神秘化し、これに反対する者、従わない者を、神に対する反逆者、即ち悪魔^{サタン}だ、異端者だ、敵だと見て、神の前にはそのような敵の存在は一切許されないとして、批判者を排除、抹殺しようとする。

以上のような心理が起こるから、宗教戦争、また宗教団体間の闘争は、残酷なものになるのである。

神であると信じている教祖への自己同一化が進むと、女の人の場合には、教祖に貞操を捧げることになんの抵抗も感じなくなる。それどころか、むしろそれを喜びとするようにさえなるのである。また、教祖の中には、それを利用して、神を喜ばせると罪が消

えるといつて、女性を犯す者が出てきたりするのである。こういう場合は、教祖にも貞操を捧げた女性にも全く罪悪感を感じこらないのである。教祖達が女性スキャンダル問題を起こすのは、このような心理状態からである。

女性の教祖が神格化されると、男性が奉仕することになる。だから女性の教祖の周囲に集まる男性に、男らしい男はいないのである。

自分が信じている信仰を一番正しいと信ずるあまりに、自分の信仰以外の信仰をしている人が敵に見えたり、不幸に見えたりするのは、その人がヌミノーゼ心理に陥っているからである。ヌミノーゼ心理に陥っている宗教家は、ほかの人やほかの教団の話は絶対に聞いてはならぬといい、違反するとその行為は神にそむくものであるとして、「罰が当たる」というのである。

このように考えてゆくと、現在の日本の宗教団体の指導者、幹部、信者で、ヌミノーゼ心理に陥っていない者は一人もない、といつてもよい。

自分を神であると思つている教祖は、自分のいうことがすべて神の言葉だと考えているから、ほかの人の話は聞いてはならぬといい、昨日いったことと今日いったことが

違っている、それもわからないのである。

ヌミノーゼ心理は偏向・倒錯心理である

神格化された人物への信仰（メシア信仰）は、時間とともに狂信化、盲信化される。神格化された人物が語ること、また、そこから出た情報は、すべて正しいこととして無批判に信じられ、信じない者は神の敵であり、「罰が当たる」と勝手に思い込むからいったん信じ込むと、なかなか離れられないことになる。離れることに自らが恐怖するのである。

神格化された人物を少しでも傷つけたり、また否定すると思われる情報、さらに、狂信し、盲信している人達に自覚させ、批判力を与えると思われるような情報は、頭から「悪魔の声だ」として拒否するか、無視しようとする。だから、ヌミノーゼ心理者の集団の中では「悪魔だ」といわれた人の方が正常だということになる。こうして、誰が考えても正しい意見をいっている人達が、その教団をやめてゆくという現象が起こってくる。

ヌミノーゼ心理者の集団では、正しいこと、真実であることが拒否され排除され、自
分達に都合のよい情報だけを集め、そういう情報を提供する人間のみを重要視し、信用
するようになる。

この心理状態が強くなると、正しく健全な情報は入らなくなり、正しい意見をいう者
は発言を封じられ、遠ざけられ、寄りつけなくさせられる。そしてますます閉鎖的にな
り、公開の場で第三者を交えて話をするといったオープンな態度は絶対にとられなくな
る。

教祖を神格化し、その神に仕える聖なる使徒と自らのことを考える弟子達は、自分達
に反対意見を述べる者を神に対する反逆者だとみなし、神に反逆する者はその存在を許
さず、滅ぼすのが正しいと考えるから、その排除の仕方は、計画的で執拗で陰険である。
ヌミノーゼ心理を持っている者も良心はあるのだが、内心では間違っていたと気づい
たとしても、その間違いを認めて修正するほどの勇氣は持たないから、依然として自分
を正しいと思わせようとして虚勢を張るし、自分の非を突かれないように身構えて、人
を疑う心が強くなり攻撃的になる。

内心、すでに自分の非を認めていても、それを公表して修正する勇氣を持たない者は、常に周囲から「あなたのやっていることは正しいのです」といつてもらわれないと不安になる。それで、いつも取巻きや親衛隊を連れて歩くということになる。一人で歩くことはこわいのである。

また、ヌミノーゼ心理は偏向した倒錯心理であるのに、そのことに気づかず、神は自分の味方だと信じているから、自分達に同調しない者を敵だといい、「悪魔」^{サタン}だという。そのようにして自ら敵対関係をつくり出していながら、相手が自分を攻撃すると考えしてしまうのである。

その宗教団体にヌミノーゼ心理になった信者がふえてくると、そのヌミノーゼ心理になった者達が自分達に都合の悪い者を排除しようとして混乱が起こり、やがて分裂することになる。

こういう時に神格化された教祖は、必ずヌミノーゼ心理の集団を正統派とするから、そういう教団では内部に混乱が起こるたびに正しい意見を持つ信者は排除されて、やめてゆく。長くなると、どの教団でも腐敗、墮落してゆくのはそういうわけである。

メシア信仰はヌミノーゼ心理がつくり出したものである。メシア信仰はいつの場合でも混乱と争いを生み出し、起こっては消え、消えては起こってきた。そのことは、西洋のメシア信仰の歴史が教えている。

ヌミノーゼ心理に陥った者は、いかに自分を正当化しても、絶対に調和ある世界をつくり出すことはできない。自分は神の側に所属する聖なる使徒であって、相手はまだ神の恩恵にあずからないかわいそうな者であると見るから、相手に一方的に話すだけで、相手の話を静かに聞こうという心の余裕など全くないのである。

ヌミノーゼ心理の解決法

狂信し、盲信している者はその人（教祖）だけを見て、その人がどういうことを説いているかを問題にしない。説いていることが間違っているとしてもその人を信するのである。その人がどんなに非常識で、社会の良識、良俗に違反した行為をしても、それはわれわれ凡人には理解し難い神聖な行為であると見るか、またはそんなことは敵の宣伝で実際ではないと考えるのである。有名なところでは創価学会の池田大作会長の女性スキャン

ダル事件がそうである。

神格化された教祖の非を認めることは、自分の信仰が間違いであったということになるし、それまでそれを絶対に正しいと信じてきただけに、その間違いを認めたくないから、心はいつも不安であり、空虚になってくる。その心の空しさをごまかすために、人に対して押しつけがましい高圧的な態度をとるか、または相手が強いと見ると同情を求めるといふような泣き落とし戦術に出て、相手の立場をよく理解して、しみじみと話し合うというようないことは絶対にしなくなる。しようとしてもできないのである。

神だと思われたい教祖と、神だと信じ込もうとする信者の間には、決して正しい心理状態は生まれない。ますます心の自由自在さを失って狂信し、盲信するようになる。その教団のありかたが歪んでくるのは当然である。

もともとヌミノーゼ心理になる者は、知性の欠如した、感情的にのみものごとを考え、傾向の人であるから、まともに話をするには非常にむずかしい。

ヌミノーゼ心理になるのは女性に多く、男性では男らしさのない、煮えきらない、優柔不断タイプの人がよくなる。

このような人々を正常な心理状態に引き戻すためには、本人がその間違いに気づくまで放任するか、くりかえし正法を知らせる以外にない。しかし、もともと知性も智慧もどこか欠如している人が多いのであるから、当然時間のかかることである。

ヌミノーゼ心理による熱狂的なメシア信仰は、いずれ冷却期がきて反省しなければならず、やがて消滅してゆくのである。

ヌミノーゼ心理とエゴイズム

エゴイズムとは

宗教団体は、立教当初は純粹で清潔であるが、信者や会員がふえて組織が大きくなると、教義を広めることよりも組織を維持することに重点がおかれ、会議でも、教義を云々することはなく、いかにして組織を拡大するかが主として協議されるようになる。

およそいかなる組織であっても、その組織を混乱させる原因に「エゴイズム」があるが、宗教団体の組織の場合は、エゴイズムの上にヌミノーゼ心理がプラスされるのであるから、一般の組織の混乱分裂よりも、その状態は複雑である。

エゴイストは、他人のことはおかまいなしで自分自身のことしか考えない。だから常に自分の存在を脅かされてはならないと、自分を守ろうとして身構える。

元来、人間は愛の主体であり、他人との関係なしには自分の存在はありえない。しかし、エゴイストは、他人を思いのままに支配しようとして権力を求めると同時に、常に他人が自分をどう評価するかを気にし、いつも誰かからほめられていないと気が落ち着かないようになる。

また、自分の実力とは無関係に、実力以上に人に見せようとする自己顕示欲が強く、故意に自分を立派に見せようとして、自分に都合の悪いところは無視し、他人から指摘されても一切それを認めようとはしない。そして人の立場などは少しも考えずに、自分に都合のよいように人を動かそうとする。

他人に対しては、その人の欠点だけを探してそれをクローズアップし、長所は決して認めようとしめない。それだけでなく、みせかけのニセモノの自分自身を誇張し想像して、他人がどんなにすばらしくても、その人を悪い人、欠点の多い人であるかのように勝手に想像する。そしてその想像をつづけているうちに、本当にそうだと信じ込み、その人を心の中で軽蔑することによって、誤った優越感をたのしむようになる。

慈悲・愛を口にしながら非常識な言動をし、人を中傷して陥れようとする人達は、又

ミノーゼ心理に陥ったエゴイスト達で、そういう人達の集まりでは、人の悪口をいい合
い、人を中傷してたのしむということになり、お互いに長所を認めてほめ合い、愛し合
うということは一切なくなる。エゴイストは、他人の中傷を、事実を確かめることもせ
ず、簡単に信じ込む。

その人がエゴイストであるかどうかは、その人が他人の中傷を喜んで聞くか、人の欠
点のみを情報として集めていないかを見ればわかる。また、他人が自分をどう見ている
かを常に気にしているから、人目を引くような服装をし、自分に追従する人のみを喜ん
で近づけ、少しでも意見をいう者は遠ざけるようになり、人を人とも思わない傲慢な態
度をとるようになる（現在の宗教団体は全部このようになってる）。

真の自己の確立は、どこの集団に所属していなくても得られるものであるが、多くの
人は、現実には必ずなんらかの集団に所属していて、その中で安心感を得ようとしてい
る。この心理は、宗教団体においては、ほかの宗教団体を無視するか、低く見るか、敵
対視するという心理状態を生み出し、ヌミノーゼ心理とダブって「宗教我」を生み出す。
この宗教我が強くなると、ほかの宗教団体の信者や会員と親しく話し合うということ

は全くなくなり、相手を蔑視することによって、自分の宗教が立派であると考えられるようになる。

有力な集団に帰属していることは、それだけその人の社会的信用を高めることになる。たとえば、ソニーとかナショナルの社員であるというと、中小企業の社員であるというよりは立派であるとするのが、日本社会の現実である。しかしこのような見方をするのは日本だけで、外国ではこのような見方はしない。

日本人は自立性に乏しい。どちらを選ぶかというのでも、たとえば宗教の場合でも、どちらが信者や会員が多いか、どちらが神殿が大きいか、どちらが立教が早いか、という事で選んで、どのような教義内容であるかということとはあまり問題にしない傾向がある。

エゴイズムとヌミノーゼ心理は、自分が信仰している宗教団体の長所とか美点を不当に拡大し、ありもしないことまででっちあげて信じ込み、また信じ込ませようとして、ほかの宗教団体のことは、その欠点をないものまでつくり上げ、数えたてて悪くいう。

これらの考え方は全く正法に反するわけである。釈尊が説かれた「正見」（正しく見

る)に反するのである。

集団エゴイズム・精神公害・宗教我

このようなエゴイストが集まると、集団エゴイズムとなる。政党の対立、団体の対立、職場の対立、宗教団体の対立も、みなエゴイズムから起こる。精神公害の中で一番恐ろしいのが宗教公害である。間違ったことを、正しいと信じ込ませた結果の精神公害が一番危険で、人格まで破壊させてしまう。宗教団体のエゴイズムを「宗教我」、「宗団我」と私は呼ぶ。

自分の弱さを知っている人間は、常にどこかに拠るべき所を求める。劣等感、罪悪感などを持って、自分で自分を信じられない者ほどそうである。エゴイストがヌミノーゼ心理になりやすいのであるが、そのような人は自分自身の無力、無能力さを知っているので、一人で決断し、一人で行動することができない。

たまたまそこに異常能力、超常能力を持つと信じられている者が現れると、その人達はたちまちにしてそこに心の拠り所を求め、必要以上にその人物を神格化する。このこ

とによって自分のヌミノーゼ心理とエゴイズムを満足させ、自己陶醉に陥る。そして劣等感、罪悪感などの裏返しである権力欲や名誉欲を露出させて、自分達の所信を他人に強制しはじめる。

創価学会員の折伏、GLAがミカエル佳子氏をメシアだとした時の状態がそうである。ヌミノーゼ心理とエゴイズムのダブった者は、押しつけがましく、高圧的で、思いやりがなく、人に迷惑をかけても平気で謝罪もせず、責任は決して自分でとろうとしない。

だから正しい信仰をするためには、ヌミノーゼ心理とエゴイズムをなくして、敬虔な、謙虚な、それでいて正しい真の勇氣を持ち、知性を明らかにし、正しい批判精神を持たなければならぬのである。

信仰は強制すべきではないし、また、強制されてすべきものではないが、心の弱いエゴイストは、その強制圧迫に屈して、正しく見、正しく考えることを放棄し、無我ですなおであると自分自身をごまかして信仰することになる。全くあわれな人々である。

神仏の名を利用して権力欲、名誉欲、支配欲、それに伴う金銭欲を持った宗教家と、正しく見、正しく考えることを放棄した気の弱い信者との間に発生するのがヌミノーゼ

心理である。

ヌミノーゼ心理者の集団では、信仰についてだけでなく、人間性の向上・啓発にとつて一番大事な自立性、自己の確立は問題にならなくなり、その教祖達にいかにも忠誠を誓うかということが、信仰の尺度とされる。

たとえば創価学会では、心が正しく安らかであるかというようなことは全く問題にしないのであって、いかに熱狂的に池田大作会長の名を叫んだかという、その狂気じみた興奮ぶりが信仰度の評価となっているようなものである。だから創価学会では、がむしゃらで人のことなど考えない非常識な人間が高く評価され、気が弱くておとなしく、出しゃばることのあまり好きでない人は、信仰が足りないということにされるのである。

お世辞とか追従は、気の弱いエゴイストが、気の強いエゴイストに取り入っておだてる手段である。弱いエゴイストは、強いエゴイストに対してはものがいえない。なにをされても反抗できない。その抑圧され鬱積うっせきした感情は、一転して冷酷無情なものとなり、その感情のはけ口として、その集団の中で排除されようとしている心の正しい、考え方の正しい者に向けられる。彼らは知性、理性をはずした非常識・非人道的・感情的な行

動に出て、自分の存在を認められようとする。

たとえば、GLAのミカエル佳子氏が、ミカエル宣言をして、「釈迦・キリストは人間が幸福になる道を説かなかった。仏教・キリスト教はローカル宗教である。あと五年したら世界の人類はみな私の前に跪くのである」と、昭和五十二年三月五日に宣言した時、これに対して断乎と反対したのが、私と当時の関西本部長中谷義雄氏と理事の中村勇氏の三人であった。

GLAの講師達は、ミカエル佳子氏を支持するヌミノーゼ心理の信者に対して、私達三人の排斥運動を指令した。その者達の悪質な中傷戦術は、およそ常識では考えられないものであった。

もう一人反対していたある寺の住職があつた。この人は勇気のある人で、自分の発行している機関誌の昭和五十二年十二月号に堂々と、

「解体寸前の岐路に立つGLA 苦しまぎれに教義の誤りを認める」という文を発表した。

この記事の内容は、同年九月二十九日、高橋信次先生の未亡人栄夫人を中心にして

の理事会で、「ミカエル佳子といったのは間違いであった。今後絶対にいわせない」というものだった。

この直後に佳子氏が首謀者になって、現在のGLAを指導している若い講師と共謀して、悪口雑言の限りを尽くし、暴行まで働きかねないという事件が起こったのである。

この寺の住職氏に対して、実に非常識な、非人道的な、およそ信仰をしている者が書いたとは絶対に思えない中傷の文書がバラ撒かれた。

その住職の宗派のお寺全部に、あの住職はこうであるから、あのお寺には協力するな、という中傷文を送りつけた。大きな葬儀になるとお坊さん達がお互い協力して読経するものであるが、あの住職はこうであるから葬儀には呼ぶな、というわけである。

寺の死活問題となったので、その住職は弁護士に相談して、GLAを告訴することにした。裁判の場でGLAの宗教上の欺瞞性、宗教家としてあるまじき、手段を選ばない悪質な中傷妨害を国民の前に暴露して、社会的制裁を加えたいというわけであった。裁判で争われては不利と見たGLAは、弁護士を立てて和解を申し入れたのである。

このように、ヌミノーゼ心理にエゴイズムがプラスされると、実に非常識・非人道的

・非宗教的なことが平気で行われるようになるのである。そういう教団では、神の前に敬虔になり、謙虚になるというような、宗教人としてまず第一に持たなければならぬものは微塵もなくなり、むしろ悪徳とさえ見られるような状態が現出されてくるのである。

自分の存在を認められようとして、非常識かつ非人道的な排斥運動には加わらない気の弱いエゴイストは、自分自身の心の中で、自分達の宗教に反対する者は悪者であると思いつくことによって、自分のことを、正しい神仏の側につく正しい信仰者であると信じ込もうとするのである。

ヌミノーゼ心理にエゴイズムがプラスされた似非信者は、人の話を聞いて自分が正しいと信じ込んでいる根拠が崩れると自分の立場がなくなるから、絶対に人の話を聞こうとしないし、また人に聞かせようともしない。だから話し合って理解しようとする態度は全くとれないことになる。異端者だと指摘された者に対して集団でリンチを加える者は、一人では堂々とものをいえない、自立性のない、心の弱い者達である。

正法こそヌミノーゼ心理とエゴイズム克服の道

正しい信仰をするためには、ヌミノーゼ心理とエゴイズムがなくなって、冷静で客観的な自由な心になり、正しい知性と理性による判断力と、正しい批判精神を持たなければいけないのである。

ヌミノーゼ心理にエゴイズムのプラスされた信者の本質は、仮面をつけて嘘をつき、自分と世間を欺くことにある。信仰に熱心な者ほど、二重人格者だといわれる原因はそこにあるのである。

自分でない自分を、自分にも世間にも見せようとして嘘をついているのであるから、いつかその嘘がばれはしないかと身構えることになる。少しでもその嘘がばれそうになると、猛然として相手を罵倒して攻撃的になり、相手が悪いと思ひ込み、相手を倒すまでその攻撃をやめない。自分と意見の違う信者同士で実に醜い争いを展開するのは、自己防衛が相手に対する攻撃に変わるからである。

本来、信仰というものは、仏教的にいうと安心立命、即ち心を安らかにして、人間はなんのために生きているのかということを知り、生死を超越した一大不動心を得るため

のものである。

ところがヌミノーゼ心理とエゴイズムに支配された宗教団体では、心の安らかさは少しも得られないばかりか、信仰すればするほど矛盾を感じて不安になってくる。にもかかわらず、そういう時でも教祖や教団は悪くはないが、そのように矛盾と疑問を持つ自分が悪いのであると、自分を悪く思ってしまうのである。

このような時に、ではどちらが正しいのであるかと、教祖も一人の人間であって神ではないと、教祖の神格化を真っ向から否定して、同じ人間であるという対等の立場に立って公正な判断をすることになると、その間違った宗教団体をやめることができるのである。

ヌミノーゼ心理とエゴイズムの支配する宗教団体では、その中でいかに名利を得ようとするかを競うようになり、神格化された教祖とその教団に対して忠誠を誓うことが、その教団で生きてゆくための保身術となり、伝道とか社会奉仕は、心の弱い者の自己満足、または逃避場所とされ、信仰への謙虚さ、神仏への敬虔さは、自分自身の心の弱さの裏返しでしかないということになってしまふ。

信仰とは、神仏と自分との直接の関係の中にあるのであって、神仏と自分との間に仲介として立つ人があって、その仲介者を通さなければならぬという信仰は邪教である。キリスト教でも、司祭とか牧師、あるいはローマ法王を通してというのは間違いで、キリストと自分とが直接につながらなければいけないのである。

神格化された教祖は、自分に忠誠を誓わせ、自分以外の者の話は聞いてはならぬといひ、また、そのような教祖に忠誠を誓っている信者は、ほかの人の話を聞くと罰が当たると勝手に信じ込み、自分で自分の心を束縛してしまう。

だから、その教団の指導者達が、「ほかの人の話は聞くな」、「ほかの宗教団体の本は読むな」、「この宗教団体の本さえ読んでいれば、ほかのどんな本も読む必要はない」といひはじめ。そういうふうになれば、その教団は邪教化したといつてよいのである。

信仰は心の完全な自主性、自由性を獲得するためのものである。だからそれを阻害するものは正しい宗教、正しい信仰ではない。

完全な自主性、自由性を得ることを自己の確立というのであるが、そのためには、それまでの心の虚構仮面を剥ぎとって、人によく見せようとか見られようとする、本当の

自分でない、芝居をしている自分を捨てて、ありのままの自分をそのまま認めるということからはじめないといけないのである。

ヌミノーゼ心理のエゴイストは、それまで間違ったことをしていたことを自分の良心が知っているから、心の内をじっと見つめて反省することがこわいのである。このような人に反省懺悔を強調しないで、ただ拜むこと、信ずることばかりを説いている教祖は正しくないのである。

エゴイズムは自分と他人とを切り離す心理で、エゴイズムはフロイトのいうナルシズム（自己愛）と同じ傾向性を持つ心であるから、こういう人はみなと一緒にあって、一つの心になって愛し合うということができない。夫婦調和していない人、性的欲求不満の人はそうなりやすいが、神格化された教祖が女性であると、その周囲には夫婦調和していない欲求不満を持った男性が群がる。それは恐妻家でもある。妻によって満たされないものを、代償的にその女性教祖に求めているのである。

ヌミノーゼ心理のエゴイストは嫉妬深い。また、うぬぼれが強い。だから、自分の存在を危なくする者、自分の幸福を脅かすと見られる者、自分の行動を批判し制約する者

達に対する嫉妬心はものすごく、そういう者は滅びるべきであると考ええる。

各宗教団体の講師、幹部達が、女性だけでなく男性もがみな嫉妬心が強く、そのための内面的な闘争が常に絶えない原因はここにあるのである。とにかく、相手が倒れるまでつづけられるのであるからすさまじい。慈悲や愛を説く宗教団体の内部で、慈悲や愛とはまるっきり正反対の争いが絶えない原因がここにあるとわかったら、反省しなければならぬのは、教祖をはじめとして講師や幹部達である。信者達は、そのような教祖や講師、幹部を立派な人格者であり指導者であると信じ込んできたことを、反省しなければならぬのである。

釈尊、キリストが説かれた正法は、ヌミノーゼ心理とエゴイズムによる集団我、宗教我を否定して、この世界に、神の御心の実現するユートピアを建設しようとするための心の準備を教えるものである。

霊能力を求めるオカルト・ブームも、その根因は「ヌミノーゼ心理」にある。自分もああいう霊能力を持ちたいと思う心がブームを呼んだのである。

物質文化はこれまで霊の存在を否定してきた。迷信だといった。物質文化、科学文化

では人類の幸福と平和は実現しないということがはっきりといひ出されるようになって、精神的、靈的なものに関心を持つ人々がふえてきた。

ところで靈能力に基づく靈的治療には三通りある。

1 心が明るく正しくなって、靈的にいくらかでも向上した結果として自然治癒能力が高まり、病気が治るもの。

精神身体医学的治療がこれに入る。

2 正しい宗教心を持ったその精進の結果として、高い靈界より奇跡的治癒が行われるもの。

この場合は、必ず正法が説かれている。

3 強力な動物靈の靈力によって行われるもの。

この場合は、ただ信ずることだけが強調されて、正しい法を實踐することが説かれない。治ったからといって、そこにお参りすることや、お祭りすることを怠ると、必ず動物靈に復讐されて、えたいの知れない、医者でも原因のわからない病気にされてしまう。

病気が治ったからといって、それでその宗教を正しい宗教と思うのは危険である。そのためには、そこで正法が説かれているかどうかということを中心にして、「正しい宗教かどうかを判断する基礎知識」によって判断をしなければならぬのである。要するに、正しい信仰をするためには、ヌミノーゼ心理によって教祖や指導者を見ないで、冷静に客観的にありのままの姿を見て正しく評価しないといけないのである。

病氣治しと宗教

各宗教団体は、自分のところで治ったのは正しい治り方であるが、ほかの宗教団体で治ったのは嘘の治り方であるという。そう思うのはヌミノーゼ心理とエゴイズムに支配されているからである。しかしどこの宗教団体であろうと、治ったのは事実であって、あれは嘘の治り方だということがあるわけではない。

金光教、天理教、大本教、生長の家、立正佼成会、創価学会、霊友会、あるいは神靈教、救世教、真光文明教団、孝道教団、善隣会、弁天宗などから街の祈禱師に至るまで、どこにでも治ったという体験はある。

ではどの宗教で治ったのが本当の治り方で、どの宗教のが嘘の治り方なのであるか。治ったという事実だけを正しさの証明とするならば、どの宗教も正しい宗教だといわなければならないが、治らなかつたという事実だけから見れば、どの宗教もダメだということになる。だから、病氣治しだけで宗教の正当性を主張することは間違っているのである。

では、どうして宗教で病氣が治るといふようになったのであろうか。それを解明してくれたのが「精神身体医学」である。

これまでの医学は、人間の肉体も一つの物体だと見て、病氣の原因はすべて黴菌によるものだとしてきた。だからその黴菌を殺せば病氣は治るといふことで、薬を飲ませたり注射したりしてきた。その方法で確かに天然痘、コレラ、チフス、結核といった細菌性の病氣は少なくなった。

ところが、いかに薬や注射でも治らない病氣がふえてきた。

『心で病氣を治す事典』という本がある。その中に、

「成人病の大半は心が原因で起こる。心の持ち方が老化も寿命も左右する。子供も大

人も心が原因の病気が激増中。心が原因で病気になっている人、なりやすい人、イライラしやすい人は心臓病に注意。頭痛の八割は心の持ち方で治せる」と記されている。

これは現役の有名な医者が書いてるのである。

狂信し、盲信している信者は、このような病気の原因の八割から九割は、心が原因であるという精神身体医学があることさえ知っていない。

もっとも、病気の原因は心にあることを知っている医者はまだ少なく、大衆が接触している医者は、古くさい物質医学を金科玉条としているから仕方がないともいえる。

心で起こる病気の種類を挙げると、高血圧、胃潰瘍、ガン、糖尿病、十二指腸潰瘍、ぜんそく、偏頭痛、心臓病、肝臓、自律神経失調症、更年期障害、頻尿症、冷え性、動脈硬化、皮膚病、アレルギー性しっしん、多汗症、バセドー氏病、不眠症、インポテンツ、メニエル症候群、不感症、小児ぜんそく、小児消化不良、夜尿症などで、ほとんどの病気が心に原因があることがわかっていてる。

ガンに罹る人は、少年期から青年期、壮年期にかけて、不幸や不安など精神的な

ショックを受けて、それが心の奥底にしこりとなって残り、老年になるにつれて頑固な心を持つようになった人であるといわれている。

病気になる人は心が暗く、憎しみ、悲しみ、嫉妬、憎悪、不平不満、自己中心主義、頑固などという心を持っているからである。だから病気になりたくなくなかったら、調和、感謝、すなお、慈悲、愛、理解、思いやりなど、明るい心を持ちなさいというのである。

この精神身体医学が日本に導入されたのは戦後であり、医者がこのことを真剣に研究するようになったのは昭和三十年頃からであるから、現在の新興宗教の教祖達は、こういう医学があることは全く知っていなかったのである。もちろん信者も知らなかった。

たまたま病気になっていろいろな修行をしていたら、あることでパッとひらめくものがあった。心が一大転換を起こし、病気が治った、あるいは運命が変わった。それを人に伝えたらその人もまた治った。その積み重ねが宗教として発展した。新興宗教の発生はたいていそういうケースである。

しかし、どこの宗教団体に入信しなければならないということはない。実践倫理宏正会、モラロジー、修養団というような道德修養団体でも病気が治ったという人はいるし、

あるいはどこにも行かなくても、なにかのきっかけで心が一転して治ったという人もいる。ともかく、心が暗い方から明るい方へ、不平不満から感謝の方向へ転換すると、治るべきものは治るのである。

立正佼成会で治ったという人は、たまたま心の転機になったのが立正佼成会であったということであるし、生長の家でよくなった人は、たまたま生長の家に縁があったというだけのことであって、どこの宗教団体にも関係せず、自分の自覚によって心を変えることができれば、それでも治るのである。だから、この宗教団体でないと治らないと主張するのはナンセンスなのである。

心が変化すると、肉体の生活状態も変化する。その肉体の変化をとらえるのが、「バイオフィードバック装置」である。

バイオフィードバック装置を使って医者が患者の心の治療をするようになれば、病気を治しを目的とした新興宗教など必要はないということになる。

心の転機を与える方法には宗教団体によって、それぞれ特徴がある。それを神秘的ヴェールで包んでいるために、信者は霊験あらたかだと盲信するだけのことで、種がわ

かってしまえば、その神秘さを装った儀式は滑稽にさえ見えてくるのである。

正しい信仰をするためには、過去を反省し、ヌミノーゼ心理、エゴイズムを除去し、掛け値なしのままの自分をまず認めるところからはじめなければいけない。見せかけの自分、人によく見られようと思って自分で芝居している自分、自分でない自分、人はそういうが自分ではそうではないと思っっている自分、そのようなニセモノの自分を剥ぎ取って、そのままの裸の自分を自覚することである。そうするとすべての人、すべての物を正しく見ることができるようになるのである。

正しい宗教とはなにか

宗教の正しさを判断する三十条の基準

宗教は、人間の正しい生き方を教えるものであるから、その宗教が正しいことを教えているかどうかを判断することは、非常に大事なことである。次の三十条を知っていれば、どの宗教が正しいかを判断することができる。

1 永遠不変、一貫性があるか

その宗教の立教当初から現在まで、一貫して変わることのない教義が説かれているかどうか。説くことがくるくる変わっているものは正しいものではない。

釈迦は「初めもよく、中頃もよく、終わりもよき教えを説け」と教えられた。「今度はこれが正しいです」、「今度はこれが正しいです」という宗教は邪教である。「今度は

これが正しい」ということは、「前のは嘘でした」ということになるではないか。

2 普遍妥当性があるか

宗教は全人類が生きる正しい道を教えるものであるから、白色人種も黄色人種も、どの国であろうと、この地球上に生きている人間がみな、「それは正しい」というものでなければ正しいものではない。

日本であれば日本人全体が正しいと信ずるものでなければならぬ。北海道の人は正しいというが、沖繩の人は正しくないというとか、ある宗教では正しいというが、ある宗教では正しくないというものであってはいけないのである。また、日本ではこういうが、外国ではどう思われるであろうかという考え方をすることである。

3 正しい宗教の三つの条件

1 科学的合理主義を含む

科学を否定する宗教は邪教である。宇宙エネルギー科学者は目に見えないものの中

に「実在」があるといっている。空気中から無限にタダで電気が取れる。ほかの天体にも人間が住んでいるといっている。

2 道徳主義を含む

道徳は、人間の生きる正しい道であるから、その宗教を信ずることによって、親子夫婦が不調和になるような宗教は正しくない。

3 霊的自覚、悟りの自覚を与える

人間はいずれ死ぬのである。死んでも持っていけるのは「霊の自覚」だけである。現世利益だけを説く宗教は邪教である。

4 神と人間との間に仲介者はいらぬ

「私があなただを救ってあげます」という教祖を信じてはならない。「あなたの因縁を切ってあげます」という霊能者も信じてはならない。自分がつくった因縁だから自分で切ることができる。自分がつくった因縁を他人が切れることはできない。しかも、何十万、何百万と金を出したからといって因縁が切れるわけではない。正しい宗教は自分の因縁は

自分で切ることができることを教える。

5 宗教と科学は一致する

科学を否定する宗教は邪教である。これから宇宙エネルギー時代になる。絶対に墜ちない飛行機が飛ぶ。ガソリンがいらぬ自動車が出るようになる。物質科学の時代は終わるのである。

6 神に神殿はいらぬ

釈迦、キリストは大神殿をつくられなかった。宇宙を創造された神が、どんなに大きいついても、人間がつくった神殿に入られるわけではない。大神殿をつくった宗教は邪教である。

7 偶像崇拜をしない

人間の手で神仏をこしらえることはできない。釈迦、キリストは偶像をつくられな

かった。

8 神を祭る儀式祭典をしない

偶像を祭るから儀式祭典をすることになる。一定の儀式をしなければ神に救われないということはない。儀式祭典をしなくても人間は救われる。

9 「罰が当たる」と恐怖心を与えない

神が罰を当てることは絶対にならない。人の心を安らかにするのが本当の宗教家の使命であるのに、「神が罰を当てる」という宗教家は、「神は慈悲、愛である」ことがわかっていない。

10 正しい宗教は世襲化しない

釈迦は世襲制度にされなかった。教祖の家系だからといって、必ずしも高級霊が生まれてくることにはならない。世襲制度にするのは、教祖の自分がつくった組織財産を子

孫に譲りたいという欲望からである。世襲にするような欲望を持っている教祖に、悟りが開けて正しく神がわかるわけがない。

11 教祖を神格化しない

人間が神になることはできない。人間は人間であって、悟りの段階が違うだけである。教祖を神に仕立てて信者をありがたがらせるのは、そうした方が信者を操縦しやすいからである。教祖を神としてはならない。人間だと見よ。

12 正しい宗教は自力を説く。他力では救われない

正しい宗教は自力を尽くした時に他力があると説く。自分はなにもしないで他力だけを頼むのは、心理的に怠慢な人間をつくることになる。釈迦は「他力では救われない」といわれた。法然、親鸞が他力を説いたのは、あの時代の社会状況がそうさせたのである。自分の心をきれいにするのは自分にしかできないことである。他人ができることではない。自分を救うのは自分であることを知れ。

13 靈能力中心の説き方をしない

靈能力で病氣治しをするのは正しい宗教ではない。動物靈や地縛靈が憑依していても、病氣治しや、当てごとはする。人間は靈能力を求めめるために生まれてきたのではない。

14 いうこととやることが一致しない宗教は正しくない

その宗教が正しいかどうかを知りたいならば、教祖の私生活を見ればよい。贅沢をしていないか。豪華な服装をしていないか。大邸宅に住んでいないか。お供まをたくさん連れていないか。

慈悲、愛を説きながら贅沢している教祖は、ニセモノである。そんな金があったら、困っている人を救うことである。

15 念仏、題目だけでは救われない

念仏や題目を何万遍唱えても、心がきれいにならなければ、人は救われない。熱心な人の中には、念仏や題目をテープに吹き込んで廻している人があるが、それで救われる

というのはナンセンスである。

16 祈禱、護摩供養では救われない

釈迦は、祈禱、護摩供養をするなどいわれた。そのことは「阿含經」に書いてある。それなのに「阿含宗」では護摩供養をしている。また、ほかにも護摩供養させている寺はたくさんある。護摩供養は仏教以前のバラモン教がやっていたことで、仏教ではない。

17 禅定瞑想を教えない宗教は正しくない

釈迦は禅定をして悟られたのである。仏教というからには、釈迦は「八正道」の中で「正定」（正しく禅定すべし）を教えられ、また「觀無量壽經」の中には、「このように浄土を觀じなさい」と「浄土觀」が教えてあるのであるから、禅定瞑想をしなければいけない。「念仏」や「題目」を唱えることは「マントラ」（真宗）といって、悟りを得るための補助行としてやっていたものなのである。

18 現世利益だけを説く宗教は正しくない

新興宗教は、信仰すれば現世利益があると説く。だから、あっちの神さまを拜んでご利益がなければこっちの神さまと、神さま参りをするをはじめる。お参りして祈ることといえば、「病気を治してください」、「金が儲かりますように」、「勉強しなくても合格しますように」など、欲の深いことばかりである。

そのような考えでお参りをする人は「欲望肥大症」で、お参りするたびに欲の深いことばかりを祈っているではないのか。そういう人が、「私の心がきれいになりますように」と一遍でも祈ったことがあるのであろうか。かりに祈って病気が治り、地位、名譽、財産を得たとしても、人間はそれらのものを全部残して死んでゆくのである。そんなものはあの世へは持ってゆけないのである。現世利益だけを説く宗教は邪教である。

19 正しい宗教は最初に「疑問を持つ」と説く。最初から「すなおに信ぜよ」とはいいない

たいていの宗教が、「すなおに信ぜよ、疑問を持つな。疑問を持つのは信心が足りな

いのである。信心していたら疑問がなくなる」という。そういう宗教を信じてはならない。

疑問に思ったことが信仰しているうちになくなることは絶対はない。疑問は解決した時になくなるのである。疑問はすべて解いて、その後には、これは信じなければならぬ、もうこれ以上は疑えない、と思ったものが残るから、その時にそれを「すなおに」信ずべきである。

現在、信仰を持っている人が共通して悩み苦しんでいる問題は、自分の信仰している宗教に疑問を持っているということである。疑問を持つとその宗教指導者は、「あなたが悪い、疑問を持つのは信心が足りないからだ。すなおに信ぜよ」という。そういわれると、すべての人が、その宗教が間違っているのではないかということは全く考えないで、自分の方が悪いと思ってしまう。この考え方が間違っている。あなたが正しいのである。疑問を持ったとしたら、その宗教が間違っているのであって、あなたが正しいのである。正しく信仰する者は卑屈になってはならない。自分が信仰するのであるから、その宗教は、正しいかどうか疑ってかかってこそ、正しい信仰をすることができる。

20 正しい宗教は金で救われることを説かない。布施を強制しない

宇宙創造の神を信仰するのには一円の金もいらぬ。現在の新興宗教がみな大神殿をつくっているというのは、金をたくさんあげれば救われるといった結果の産物である。金をあげてそれだけで心がきれいになるであろうか。心をきれいにするのが正しい信仰なのである。自分の心を自分がきれいにするのは一円も金はいらない。

「あなたの因縁を切つてあげます」といって、金を出せという宗教家がいるが、そんな人に金を出す必要はない。因縁は自分がつくつたのであるから、自分がつくつたものは自分で切ればよい。その方法を教えるのが正しい宗教である。釈迦は「因縁を切る方法」を教えられたのである。その方法を正しく教えているのが正法である。

毎月献金を強制して、それでグラフをつくり、金額を書いて、信者の競争心、名誉欲を煽つて、たくさん寄付した信者を特別待遇している教団は邪教である。

布施はその人の慈悲の心の自然の発露に任せるべきで、教団が金額を決めてやらせることは間違いである。

ある教団では「聖使命会」という制度があつて、会費が毎月四百円の会員は、神さま

と紙のこより、でつながっていることになっていて、そのこよりはすぐに切れる。千円の会員は、神さまと細い針金でつながっていることになる。少々の風では切れないが、それでも台風がくると切れる。一万円の会員は、神さまと太い鉄の棒でつながったことになる。だからどんなに強い台風がきても大丈夫である。このようにいって金を集めている。

神さまが金の多い少ないで救ったり救わなかったりされるであろうか。そんな子供騙しのような方を、真剣に信じている会員が多いのであるから驚く。

金を寄付しなければ救われまいというのであったら、金を寄付する余裕のない貧しい人は神さまが救わないといわれるのであろうか。だいたい、献金する金の多い少ないで、救ったり救わなかったりする神さまがあると考えることがおかしいのではないのか。

信仰には一円の金もいらぬ。しかし、一つの団体をつくると、信者が集まるための会場を建てたり、その維持費や、運営管理費などの諸経費はいるから、そういう金は信者に支えられなければならない。

21 正しい宗教は運命学をいわない

釈迦は「阿含経」の中で、「護摩供養をするな、運命学を信ずるな」といつていられる。それなのに阿含宗では護摩供養をやり、いろいろな運命が変わる方法を説いている。運命学には、姓名学、骨相、人相、手相、気学、印相、墓相、家相などがあるが、こんなことに夢中になっているのは日本人だけである。外国人はこんなことで運命が変わるとは思っていない。運命学にふり廻されて心を小さくすると、あなたの運命はますます不幸になる。運命学を捨てて、自由な心になれ。正法を知ったら自由な心になれる。

22 正しい宗教は「霊肉一体」、「色心不二」、「心身一如」を正しく説く

人間とは「霊」であり、「肉体」は霊の乗り物である。肉体の救いだけを説いて、霊の救いを説かないのは邪教である。現世利益というのは肉体の救いだけのことであるから、それだけではいけないというのである。運命学は肉体中心のことだけをいって、心のことをいわない。

たとえば、あなたがどんなにりっぱな印鑑をつくり、どんなにりっぱな家に住んでい

ても、あなたの心が悪ければ、確実にあなたは不幸になるのである。テレビや新聞を賑やかにしている政治家をはじめ、強盗殺人、詐欺、暴力犯などには、おそらく姓名判断によって親から名前をつけてもらったのであろうと思われる“いい名前”の人間が多い。どんなによい名をつけても、心が悪ければ運命は悪くなるのである。

運命学にふり廻されたい、強い自由な人間にならなければいけない。

23 「肉体なし」、「物質なし」と説く宗教は正しくない

肉体は死ねば灰になる。物質も焼いたり溶かしたりすればなくなる。だから「なし」というのは、物事の半面だけを見ているのである。

「本来なし」といっても、それは観念的に頭で考えることはできるが、そう考えるその人は、肉体を持っているではないか。「なし」といっても、人間は肉体を持って生まれてくるのではないか。人間が肉体を持って生まれてくるようにされたのは誰なのか。

「物質なし」というけれども、太陽も地球も、水も空気も、そして人間が生きてゆくのに必要な食糧、衣服、住宅など、みな物質ではないのか、人間が生きてゆくうえに必

要な環境、それはみな物質ではないのか、すべての天体もみな物質ではないのか。

だから、「肉体なし」、「物質なし」と説いている「生長の家」は、不完全な宗教なのである。肉体も物質も神さまがつくられたものなのであるから、肉体も物質も大事にしなければならぬ。しかし、肉体や物質は、人間の本体である霊、魂、心の勉強をする素材なのであって、道具なのであるから、目に見える肉体や物質だけが「ある」と考えて、肉体や物質だけを大事にするのは誤りである。やはり、人間それ自身であるところの「目に見えない霊、魂、心」を大事にしなければいけない。だから、肉体だけの救いを説いて、霊、魂、心の救いを説かない宗教は邪教である。

24 正しい宗教は「水子が崇る」といわない

「水子の崇りだ」といって、水子供養をさせる宗教は邪教である。

人間の霊魂が完全に肉体に宿るのは、出産の刹那せつな、グーッと呼吸をして「オギャー」という産声をあげた時である。それまでは、宿る子供の霊は霊界にいて、やがて生まれる肉体が、母となるべき人の胎内でどのように発育してつくられているかを見守っている

るだけであり、発育が途中で中絶されると、「自分の宿るべき肉体は、母親となるべき人によって中絶させられた」と知って、霊界（あの世）に引き返すのである。あの世における霊は、慈悲と愛の尊さ、憎しみや怨みはいけないということを知っているから、母親となつてくれる人を怨んで苦しめるといふことは絶対がない。子供となる霊は、「肉体を持って霊の勉強をする計画が失われて、輪廻転生の歯車が狂った」と思ふのである。

しかし、母親となるべき人は、中絶したということ、「生命ある者を殺した」という罪悪感が起こる。罪悪感が起こると罰が当たって当然だと思ひ、なにかちょっとしたことがあつても不幸になりはしないかと恐怖心を起こす。そのような恐怖心を利用して、浮浪霊、地縛霊が憑依し、いろいろな現象を見せるようになる。そうして罰が当たつたと思わせるのである。

それをまた、本当のことを知らない宗教家が、「それは水子の祟りだ。供養をせよ」といい、祭らせ、金儲けの材料にしているのである。水子地蔵や供養塔を建てると、またそこに動物霊などが憑依しておかしな現象を現すから、そんなものを建てる必要はな

い。

25 正しい宗教は、先祖供養をしたら守護霊が憑くといわない

我々は、生まれてくる時にすでに一人ひとり守護霊は憑いているのである。憑いていない人は一人もいない。

守護霊が解決できない問題は、守護霊が指導霊に頼むことになっている。心をきれいにすると守護霊は直観として教えてくれる。なんとなき予感とか、虫の知らせというのも守護霊の指示である。守護霊の指示は直観として、心の内からの囁きとして聞こえてくる。耳元で外から聞こえてくるのは、動物霊か地縛霊のものである。

今まで先祖供養しなかった人が、先祖には感謝しなければならぬと思つて感謝の心を起こし、心をきれいにするとよいことがあるのは、そうすることによって守護霊が指導できる心の状態になって、先祖の霊は補助的に協力することができるようになるからである。

「守護霊を持って」とか、「先祖供養をすると先祖の中で一番徳の高い人が守護霊になつ

てくれる」といっている宗教家がいるが、その人達は霊界のしくみを知らない人である。なんとなく心の内からふっと出ててくる思いは、守護霊の導きなのであるから、その直観にすなおに従う人は幸福になる。

26 正しい宗教は、輪廻転生を説く

人生は一回きりではない。死ねば灰になっておしまいであるという宗教は邪教である。人は誰でもが、自分の前世はなんだったのであろうかと思うものである。人にはそれぞれ個性があり、その人独自の才能というものがある。それらはみな前世で学んだものであり、つくったものである。今生で学んだものは来世に引き継がれてゆくのである。

27 「あなたの因縁、業は、私が引き受けました」とか、「因縁を切ってあげます」といって金を取る宗教家を信用してはならない

よく「因縁を切ってあげますから、写真やその人が身につけていたものを持ってきなさい」という人がいるが、そういう人は本当の神理を知らない人達である。因縁はその

人が心でつくるのである。運命は「生命を運ぶ」と書く。運命もその人が心でつくってゆくのである。いくら祈禱を試みたところで、その人が心を変えなければ因縁も切れないし、運命も変わらない。

「因縁を切ってあげます」というのは気休めである。そうして金を取る。自分の因縁を他人が切ることとはできない。そういう宗教家に騙されてはならない。

28 正しい宗教は「自分を大事にせよ」と説く。「まず人を救いなさい」とはいわない

自分がよくなって、初めて人を救うことができる。自分がよくならないでいて、人を救うことはできない。自分を愛しえない者は人を愛することもできない。正しい信仰の出发点は、「自己を愛する」ということにある。「自分を救う前に、まず人を救え」といって折伏させたり、「愛行」といって強制的に本を買わせて配らせたりする宗教があるが、それは間違っている。自分を救う者は自分自身しかない。他力では絶対に救われない。

人を愛するということは大事なことであるが、それなら自分が困った時に人が助けられるであろうか。ほとんどの宗教が、「本山や本部に献金すると救われます」というが、信者や会員が困った時に本山や本部が金を持ってきて助けてくれるであろうか。そんなことは全くない。

だから自分のことは自分でしっかりしないといけない。自分を愛することができる者は、自分自身しかいないのである。

29 正しい宗教は「本を売れ、会員をふやせ」と強制しない

現在の日本の新興宗教は、神仏の名を利用した金集めの「宗教産業」になっている。ほとんどの宗教団体の幹部会では、「何人会員をふやしたか」、「何冊本を売ったか」、「何万円寄付を集めたか」ということが中心議題になっていて、「どんなに心をきれいにしたか」という、本来の信仰上で問題にすべきことは一向に議題にならない。

伝道も献金も強制してやらせるべきものではない。自分が救われた心の喜びを、自分一人の胸にしまっておくことができずに、自然に伝えずにはいられない、あるいは、自

分は伝道布教する時間がないので、それができる人にやってもらおう、ということでお金すべきである。

人の持っている、ぬき難い地位欲、名譽欲を刺激して、競争心を煽って金を集め、本を売らせることは、正しい宗教団体のすべきことではない。

正しいものであれば、人から人へと自然に広がってゆくものである。

30 正しい宗教は「悟り」を説く。宗教を逃避の場所にしてはならない

「悟り」と「逃避」の区別のつけられない宗教は正しくない。定期的、形式的な本山や本部へのお参り、あるいはそこで行われるいろいろな行事、家庭で花や供物を供え、鐘を叩いて念仏や題目を唱える、または天理教や皇大神宮教のように神前で踊って、うっとりなって自分を忘れる、それは、そういうことをする間、悩みや心配事を忘れるという、束の間の逃避であって、信仰による悟りの境地ではない。

多くの人々は、信仰という名によって、一時悩みごとを忘れてホッとして、心がラクになるのを神仏のおかげであるかのように考えているが、それはちょうど、映画や芝居

を観、歌や漫才などを聞いて一時悩みを忘れている心理状態と同じことである。

また、暴走族とも同じである。暴走族が一〇〇キロのスピードでオートバイを飛ばす。ちょっとした障害物にでも引っかかると転倒して生命が危ないから、一心に前方に注意しなければならぬ。それで一時悩みごとを忘れる。すると心はホツとなる。しかしスピードを落として普通速度になり、オートバイが止まると悩みごとは解決されないまま、まだ心の中にある。

悩みごとを考え出すとまた心が苦しくなつて、悩みごとを忘れるために宗教行事に夢中になり、映画、芝居を観、歌や漫才を聞き、暴走族は暴走する。悩みごととそれを一時的に忘れるのとの「いたちごっこ」で、根本的な解決にはならない。

坐禅をして、一時、すべてを忘れて「無」、「空」になるのも、その間悩みを忘れるという逃避である。

本当の悟りは、その悩みごとの原因はどこからきているか、それを反省するところから入ってゆくのである。だから、悟りを得るために、本山や本部に通わなければならぬということはない。どこでもできる。

宗教的儀式をやっているれば、たとえば葬式でお経をあげていけば、神前でご幣をふって祝詞をあげていけば、それで宗教家だと自分で思い、また、人もそう思っているが、それは本当の宗教家ではない。本当の宗教家は「心」を説かなければならないのである。

自由人になる道、解脱とは

悟ることを「解脱」という。解脱とは、一切の執着、束縛から離れて心が自由になり、自由になった心で、神が定められた法則を自由自在に駆使して、真の心の安らぎを得て幸福になることである。

そのことから考えてみると、現在の日本の宗教団体は、いろいろな規則をつくって、「こうしないと救われぬ」、「ああしないと救われぬ」といって、信者の心を縛っている。

その決めた規則に従わないと、「信仰が足りない」、「罰が当たる」と脅かしているから、人々は心の中でかえって神に対して恐怖心を抱いている。心がのびのびとらしくに安らかくなって、「これで絶対に幸せになれる」という自信が湧いてくるのが、正しい宗

教である。

このようにして見てくると、日本には現在十八万五千の宗教があるが、どの宗教が正しいといえるのであろうか。ほとんど間違っているといえないであろうか。

日本人の宗教感覚が正しくない大きな原因には、「宗教」と「道徳」とを混同し、その違いをはっきり知っていないことにある。

宗教と道德の違い

「道德」とは、神がつくられた正しい神理を基として、人間の正しい生き方の基本となる道である。

たとえば、祖先に感謝する、親に感謝する、夫婦仲よくする、兄弟姉妹調和する、人と調和する、人を憎まない、人を殺傷しない、法律規則を守って社会を乱さないなど、これらはすべて道德であって、宗教ではない。

多くの人は、そのように教えてくれるのが宗教だと間違った考えを持っている。人間として当然必要な生きてゆく道を教えるのは「道德」である。

では、「宗教」とはなにか！

宗教とは、人間は神の子であることを知り、神と人間との関係を知って、神を知り、

神と一体となることである。

「神」と一体となり、「神と自分」との関係を知るためには、すべてに感謝し、すべてに調和して、調和したところから生ずる「安らかな心」を持ち、その心で「瞑想禅定」をしなければならぬ。その時に、初めて実感体得できることになる。

そのことがわかったことを「悟った」というのであって、釈迦は「正定」（正しい禅定）をして悟り、「宇宙即我」に到達されたのである。だから、その「悟り」を得るためには必ず「瞑想禅定」をしなければならないのである。単に念仏や題目を唱えたり、本山や本部にお参りしたり、お経をあげたりしていただけでは、本当の信仰をしたことにはならないのである。

「終末正統性」を持つ、神に許され、選ばれた正しい宗教

「宗教の正しさを判断する三十条」によって、日本の十八万五千の宗教団体を見た場合、ほとんど全部が、邪教とはいわないまでも「正しい宗教ではない」ということができる。それなら「正しい宗教はないのか」ということになるが、それは「ある」のである。

では一体それはどの宗教であるか、それを知る前に知ってもらいたいことがある。

みなさんは今まで「目に見えないものは『ない』」、「目に見えるものだけが『ある』」という唯物論、唯物科学だけを信じてこられたはずである。まずこの考えをなくしてもらいたい。目に見えないものの中に「実体」があるのである。

この地球は、このまま石油を使いつづけると、二酸化炭素がふえて温暖化し、気象異

変が起こり、南極や北極の水が溶け出して海面の水位が上がって、ほとんどの都市が水浸しになると騒がれている。だから二酸化炭素を出さないクリーンエネルギーをというので、アメリカの自動車会社も電気自動車の開発をはじめた。しかし、電気は、石油や重油で発電するのであるから、地球は少しもクリーンにならない。しかも石油は偏在していて、あと二十六年すると掘りつくしてなくなるといっているので、石油に代わるエネルギーとして原子力発電が行われるようになった。しかし原子力発電は危険性がある。

そこで絶対にクリーンなエネルギーをとって開発されたのが、空気中からタダで無尽蔵に電気を取る方法である。

すでに宇宙エネルギー取り出し装置を開発した清家新一さんに対して、通産省が国の特別法人から資金を出すという話も進んでいるという。

放送電力は、地上からラジオやテレビ波のように、空に向けて電力を放送する。その放送電力を利用して無限に飛びつづける、絶対に墜ちない飛行機の研究も進んでいる。宇宙エネルギー発電機で動くロボットが開発されると、人間は一週間のうち一日か二日働けばよいということになるという。

このようにして、目に見えないものの中にいっぱいエネルギーが実在しているということがわかってきて、唯物科学は「物の半面の科学」だということがわかり、目に見えない心もエネルギーであるということがわかってきた。

心配事があると、肉体労働をした時よりも疲れ、白髪になる。

そういうことで心、魂、霊もエネルギーであるということがわかり、人間は「肉体エネルギー」と「霊エネルギー」と合体したものであり、死ぬと肉体エネルギーはなくなるが、霊エネルギー（靈魂）は永久になくならないということがわかってきた。「靈魂不滅」というと、唯物科学者は迷信だといってきたが、これが「正しい」ということがわかってきた。

人間は心でいろいろ悪いことを考え、罪をつくってきたのである。戦争などをしてたくさんの人間を殺してきたのである。

エネルギーの法則から考えて、いろいろな予言者は「二十世紀終末の天災地変」は必ず起こるといっている。その天災地変では、間違った新興宗教を信じている人は天罰を受け、正しい宗教を信じていた人だけが助かるというのである。あなたはどちらに属す

るのであろうか。

「神が許された正しい宗教か否か」を判断するのに、どうしても考えておかなければならないことがあるのである。

正しい宗教かどうかを判断する基礎知識

1 現界のほかに霊界がある

物質宇宙のほかに霊的宇宙がある。物質太陽のほかに霊的太陽がある。肉体人間のほかに霊的人間がある。肉体は死んでも霊は死なない。現界に属している事物や現象は、時間、空間の制約を受け、未知、既知の物理法則に従う。

2 神の世界のほかに悪魔^{サタン}の世界がある

神の側につく宗教もあれば、悪魔^{サタン}の側につく宗教もある。神の創造は絶対善である。悪があると考えるのは悪魔^{サタン}の側につくものである。

3 あの世にあるものがこの世にある

あの世で起こったことが、この世に現れる。

予言ができるということは、まだそのことがこの世で現実のこととしては起こっていないけれども、霊能者は、それが目に見えない世界、あの世で現につくられているのを見ることができから、予言をすることができるのである。私達は誰しもが、なんとなき予感、虫の知らせというものを体験している。それもすでに目に見えないあの世界で起こっていることを感ずることなのである。

4 現界と霊界は連続している

現界と霊界で最も忘れられていることは、現界と霊界は境目があって完全に分離しているのではなくて、連続体であるということである。高橋信次先生は「この世」と「あの世」は、あとこの違いだといわれていた。我々はこの世にいるが、同時にあの世にもいるのであり、あの世にいながらこの世にいるということである。

あの世の低い段階では、国、人種、民族、宗教、宗派、団体などの差別があるが、高

い段階に行くと、国境もない、人種の差別も、宗教の差別も全くなくなるのである。人類はこの高い霊の段階にまで進歩してゆかなければならないのである。

5 部分神理では救われない、全体神理でなければ救われない

釈迦は、「初めもよく、中頃もよく、終わりもよき教え」を説けといわれた。ある部分は正しいが、ある部分は間違っているというものは、本当に正しい教えではない。

悪魔^{サタン}は人を騙すために部分神理を説いて、最後の部分で間違ったことをいう。

これらの五つのことをよく考えさせ、自分の犯した罪の大小を反省させ、そのうえで罪の存在を否定させるものでなければ、正しいものではない。

自分が悪いのは人のせいである、環境のせいであるといって、人を傲慢にするのは正しくない。あの世の霊界での霊の救いを説かず、この世の現世だけの幸福を説くのも邪教である。

最近の宗教ブームで多くの新興宗教が乱立して、うちの神さまが「世直し」をするのだとか、うちの教義こそ「人類を救う神の計画」に参加させるものだとかといっているが、ではいったい、どのような宗教が本当に終末を救うために神が用意された宗教なのであろうか。いずれ天災地変はくる。その時こそ多くの新興宗教は潰れて、間違った信仰をしていた者は死に、終末のために神が用意された宗教の信者のみが奇跡的に助かる。そうして、釈迦、キリストが説かれた教えの原点を説く宗教のみが残ることになる。

その最後に残る宗教こそが、高橋信次先生が説かれた「正法」である。なぜなら、高橋信次先生こそが、釈迦の生まれ変わりであった方であるからである。

今すぐ、国際正法協会に入会して、神に救われる道へ進まれることである。

全体神理を説いているのは「正法」だけである

釈迦は「すべてによき教えを説け」といわれた。たとえば自動車は、すべてが完全でないと走らせられない。ほかのところは完全ですがハンドルだけはダメですとか、エンジンはりっぱなのですがタイヤが片方パンクしています、という車は走らせられないのである。

宗教団体だから、まるっきり悪いということはない。部分的には正しいことを説いているが、ほかに間違った部分があるのである。正しいことを説いている部分だけをとらえている人は、それはそれなりの結果を得ていて、この宗教は正しいといっているが、間違っって説いている部分に突き当たると、悩みが生じてきてわからなくなってくるのである。こういう場合、質問すると必ず、「それはまだ信じ方が足りない」、「もっとすな

おに信ぜよ」といわれるわけである。本来間違っているものを、いくら信じてみても間違っていることが正しくなるわけではない。

ハンドルが欠陥であるという場合、いくら「ハンドルは完全である」と祈ってもハンドルが完全になるわけではない。どうすればよいかというと、よいハンドルと取り替えればよいのである。

教祖を神に仕立てた教団の信者は、教祖は神さまであるから、神さまが間違ったことをいわれるはずがないと、教祖がいわれたことを全部信じようとする。それに疑いを持つことは神さまに対する反逆だ考えて、自分の方が悪いのだと思ってしまう。

だから、すべてが疑いなく信じられる宗教でないといけないのである。「宗教の正しさを判断する三十条の基準」を挙げたが、あなた方が信じていられる宗教団体を、ここに書いた三十条を基準にして一つひとつチェックしてみてください。そして後になに残るか。

私はみなさんが正しい信仰をして幸せになってくださることを祈ってやまない。そのためには、高橋信次先生と私の著書を読んでいただきたいと思う。

参考文献

- 『正法と現代宗教』
『宇宙エネルギーの超革命』
『地球文明の超革命』
『フリーエネルギーの挑戦』
『心の発見 神理・科学編』

園頭広周著
深野一幸著
深野一幸著
横山信雄・加藤整弘監修
高橋信次著

入会案内

国際正法協会の会員となられる方は神理（正法）を学び、正法を日常生活に実践し、多くの人々に伝え、自己の魂と人格の向上に努めると同時に、家庭、社会、国家の調和と、世界人類の平和、仏国土・ユートピアの実現に努めるものである。

この会は国際正法協会の諸活動に協力され、その運営に寄与して下さる方々の集まりであります。

会費Ⅱ（一カ月当り千五百円）

六カ月九千円 または

十二カ月一万八千円の

前納でお願いしています。

右は月刊「正法」誌の送付と会の運営協力費とさせていただきます。

国際正法協会本部

〒110 東京都台東区根岸二丁目十六番十一号

STビル惣谷四〇五号

TEL (〇三) 三八七一―四一九八

FAX (〇三) 三八七一―四一九七

郵便為替・東京2135512

今なぜ正法か
宗教改革の書

一九九三年二月十五日 第一刷発行

定価——五〇〇円

(本体四八五円)

編者——国際正法協会

発行人——園頭広周

発行所——正法出版社

東京都台東区根岸二丁目十六ー十一S.Tビル築谷四〇五号 電話〇三ー三八七五ー三四九四

印刷・製本——九州コンピュータ印刷株式会社

©Hirochika Sonogashira, 1993, Printed in Japan, ISBN4-91582-33-7

● 園頭広周先生の本 (定価は税込)

正法出版社刊

高橋信次師とともに——シリーズ

- ① 信仰の指針 定価一三〇〇円
- ② 正法と現代宗教 定価一四四二円
- ③ 恋愛・結婚・胎教・育児 定価一六〇〇円
- ④ 正法と結婚の原理 定価一四四二円
- ⑤ 舍利子が語る真説般若心経講議 定価一八五四円
- ⑥ 仏陀をめぐる女性たち 定価一五四五円
- ⑦ 宇宙即我に至る道(上) 定価二六四八円
- ⑧ 宇宙即我に至る道(下) 定価一七五一円
- ⑨ 高橋信次先生講演・著作解説集(一) 定価一六四八円
- ⑩ 大宇宙の神理「心行」の解説(上) 定価一五四五円
- ⑪ 大宇宙の神理「心行」の解説(下) 定価一八五四円

ひかりシリーズ

- ① 二十世紀の宗教 定価一〇〇九円
- ② 二十一世紀まで生き延びれるか 定価一〇〇九円

高橋信次師とともに 定価一五〇〇円

園頭広周書簡集(上) 定価一三三九円

園頭広周書簡集(下) 定価一四〇〇円

大いなる創造のために 定価一八〇〇円

G・サルバット師著／園頭広周訳
アガシヤの靈界通信(上) 定価一七〇〇円

アガシヤの靈界通信(下) 定価一五〇〇円

J・クレンショー著／西村一郎訳／園頭広周監修

● 大川隆法——「幸福の科学」批判

「大川隆法」はこう読め 定価一三〇〇円

続「大川隆法」はこう読め 定価一三〇〇円

大川隆法は仏陀ではない 定価一一〇〇円

高橋信次師こそは

真の仏陀であった(東明社版) 定価一三〇〇円

海鳥社発売

高橋信次師のことは 定価一五〇〇円

天よりの使者高橋信次師は語る 定価一四〇〇円



今なぜ正法か●定価500円(本体485円)